

看護系大学1年生が捉える看護師に必要な態度・能力

森 祥子*¹

Concept of Nurses' Attitudes and Abilities in the First-year Nursing students

Sachiko MORI*¹

〈抄録〉

本研究では、看護系大学1年生（以下学生とする）が捉える看護師に必要な態度・能力を明らかにするため、学生のミニ・レポートの記述内容を分析した。

分析の結果、学生が捉える看護師に必要な態度として【看護の対象を尊重し、安心感や心地よさをあたえる態度】【初心を忘れずに自己を高めていく態度】の2つのカテゴリーが、能力として【看護の対象とかわる能力】【他職種や地域の人々と連携する能力】【自己を見つめ、コントロールする能力】の3つのカテゴリーが得られた。

このように学生は、対象へのかかわり方という視点に加えて、看護師としての自己にむけるまなざしといった視点からも、看護師に必要な態度や能力を捉えていた。まだ臨地実習に出ていない学生ではあっても、授業の中で看護専門職者の語りを聞くことを通して、看護師の働く場所や役割を具体的にイメージし、看護師に必要な態度や能力を広い視野をもって捉えることができていたと推測された。

Key words：看護系大学1年生、看護師に必要な態度、看護師に必要な能力

I. はじめに

本学看護学科の1年生にとって、看護について学び考える端緒となるのが「看護基礎理論」である。「看護基礎理論」は、1年生の春 semester に開講され、4～6月にナイチンゲール、ヘンダーソン、ベナーらの理論について学ぶ。5月には、看護の学習への動機づけのために、実践内容・実践の中での喜びや困難・看護職を選択した理由などを身近な看護職にインタビューし、レポートを書くという課題が出される。6月下旬には、看護活動の場とその役割について更に理解を深めるために、看護職者を教室に招き、体験談を聞く機会を持つ。このような半期の学習を通して、1年生は、看護師に必要な態度や能力をどのようなものとして捉えるのであろうか。

看護系1年生に関する研究には、大学入学時の学習への期待および看護・看護職についての認識を調査したもの（小山ほか、2004）、「看護」に対する認識の変化を把握したもの（相原ほか、2004；関谷ほか、2006）、基礎看護学実習での学びを明らかにしたもの（清水・荒井、2009）、基礎看護学実習Ⅰの実習前後における看護師イメージの変化を比較検討したもの（刈野ほか、2008）などがある。しかし、看護系大学1年生が看護師に必要な態度・能力として捉えている内容に関する研究は見られない。

そこで本研究では、看護系大学1年生が捉える看護師に必要な態度・能力を明らかにすることを目的とした。

看護の初学者が捉える看護師に必要な態度・能力を明らかにすることは、看護基礎理論をはじめ、看護基礎教育の授業の内容や方法を検討する示唆を得ることにつな

*1 東海大学健康科学部看護学科 (Tokai University School of Health Sciences)

がると考える。

- 4) 医療職者・看護職者の倫理的態度について考えることができる。

II. 看護基礎理論の概要

「看護基礎理論」の授業は14回で構成されていた。各回の内容を表1に示す。

授業の達成目標は、以下のとおりであった。

- 1) 代表的な看護理論を読み、看護の主要概念である「人間」「健康」「環境」「看護」の各意味とそれぞれの関連性を理解できる。
- 2) 看護理論の学習を通して、看護が看護学を基盤とする専門職になるまでの歴史的背景が理解できる。
- 3) 看護専門職業人として求められる能力を理解し、看護学を学習するという自覚が持てる。

III. 研究方法

1. 研究対象

2009年度の「看護基礎理論」の第11回目の授業で学生が書いたミニレポート（以下、レポートとする）の一部を研究対象とした。

11回目の授業では、NICU、がん緩和ケア病棟、訪問看護の臨床経験をもつ3名の看護師を招き、20分間ずつ体験を語ってもらった。これは看護活動の場とその役割に関する学生の理解を深めることを目的としていた。

看護師の語りが始まる前に教員は、レポートを記述す

表1 看護基礎理論の内容（2009年度）

回	授業日	授業タイトル	詳 細
1	4月14日	看護とは何か 看護学とは ー構造・特徴ー	ガイダンス 自身の看護イメージ ① 看護の対象、目的、方法 ② 看護学の特徴
2	4月21日	看護理論を読むⅠ	ナイチンゲールとはどんな人か その時代背景を知る（VTR鑑賞）
3	4月28日	ナイチンゲール	「病気とは回復過程である」の意味は？ ＊人間・健康のとらえ方
4	5月12日	ナイチンゲール	「看護がすべきこと」とは何か ＊環境と看護
5	5月19日	ナイチンゲール	「病人の観察」について学んだことは何か ＊正確な観察、個別性
6	5月26日	ナイチンゲール看護論 まとめ	「看護婦（師）とは何か」 15. 補章
7	6月2日	看護理論を読むⅡ ヘンダーソン	①「基本的欲求」と人間・健康 ＊人間と健康のとらえ方
8	6月9日	ヘンダーソン	②看護独自の機能 ＊看護、専門職
9	6月16日	看護理論を読むⅢ ワトソン、ベナー	ケアリングとしての看護 ＊ケアの要素、他者のケアと自己のケア
10	6月23日	ワトソン、ベナー	看護師の倫理的態度 ＊理想の構築と責務・権利擁護
11	6月30日	看護の役割の実際	出会った看護職について共有学習 （看護実践家の体験談を聞く。その後、ミニ・レポートを作成）
12	7月7日	看護の役割と活動の場	保健医療福祉チームと看護師（協働と分担）
13	7月14日	看護師としての倫理的態度	倫理的態度とは何か（日本看護協会倫理綱領）
14	7月21日	専門職として能力維持・推進する道	・基礎教育、継続教育、卒後教育 ・自己教育と他者教育

る用紙を学生に配布した。この用紙は、A4 サイズ縦方向1枚であり、「1. 印象に残ったメッセージとその理由について書いてください。」「2. 看護活動の場（NICU・がん緩和ケア病棟・訪問看護）による看護の相違点と共通点について自分の考えを書いてください。」「3. 看護の役割について①今まで考えていたこと、②今日改めてわかったことを書いてください。」「4. 『看護師として求められる態度や能力』とはどのようなことだと思いますか?」という4つの設問と、記述スペースを示す罫線が印刷されていた。記述スペースは、設問1.～3. に対して5～7行、設問4. には13行設けられていた。

本研究ではこれら4つの設問のうち、設問4. に対する記述内容を研究対象とした。

用紙の配布と同時に教員は、本時の終わりの20分間でレポートを書くこと、レポートを書く際には、5月に行った身近な看護職へのインタビュー経験と本日の語りを踏まえることを説明した。

2. 分析方法

レポートの設問4. に対する学生の記述を繰り返し読み、学生が「看護師に必要な態度や能力」として述べている文脈を抜き出して要約した。要約の後ろに「態度」および「能力」という言葉を、違和感のない範囲で付記してコード化した。さらに、意味内容の類似するコードをまとめてサブカテゴリーとし、サブカテゴリーを類似のもの同士でまとめたものをカテゴリーとした。

分析結果に関しては、看護教育学の専門家にスーパーバイズを受け、妥当性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

学生への研究の依頼は、「看護基礎理論」の最終授業の終了後に、科目責任者ではない教員が行った。その際、これから話す内容は、授業とは直接関係がないことを前置きした。

学生には、研究の目的、レポートを研究対象とすること、研究においてレポートを扱う際には匿名性を保護し厳重に保管すること、レポートの研究への使用の可否は成績に一切影響しないこと、一度レポートの使用を承諾した後であってもその後に撤回できること、研究成果を学会発表や論文投稿によって公表すること、その内容を還元することを口頭と文書で説明した。レポートを研究で使用する可否は、同意書によって確認した。

IV. 結果

研究への使用の同意が得られた66名の学生のレポートのうち、設問4. 「『看護師として求められる態度や能力』とはどのようなことだと思いますか?」に対する記述内容を分析した結果、学生が捉える看護師に必要な態度としては37のコード、7つのサブカテゴリー、2つのカテゴリーが導き出された（表2）。また、学生が捉える看護師に必要な能力としては49のコード、10のサブカテゴリー、3つのカテゴリーが抽出された（表3）。以下コードを< >、サブカテゴリーを[]、カテゴリーを【 】、生データを「 」で示した。

1. 学生が捉える看護師に必要な態度

学生は【看護の対象を尊重し、安心感や心地よさをあたえる態度】【初心を忘れずに自己を高めていく態度】を看護師に必要な態度として捉えていた。

【看護の対象を尊重し、安心感や心地よさをあたえる態度】は、看護師が看護の対象にかかわる時の態度であり、看護の対象を第一に考え、ともに病気と向きあい、安心感を与える優しく明るい態度である。サブカテゴリーとしては[看護の対象を主体に考え尊重する態度][看護の対象に寄り添う態度][看護の対象から信頼される、誠実で責任感のある態度][看護の対象に安心感や心地よさをあたえる態度]が含まれていた。たとえば[看護の対象に安心感や心地よさをあたえる態度]の<優しく明るい態度>では、「看護するときに、患者さんに健康を取り戻そうとする意欲がわいてくるように、優しさと明るさをもった態度で接することが大切だと思います。」という記述が見られた。

一方【初心を忘れずに自己を高めていく態度】は、看護者が看護の対象とかわかっていく上で必要とされる自分自身のありようであり、[向上心をもつ][初心を忘れない][学び続ける]から成っていた。[初心を忘れない]の<初めのころの怖いという気持ちを忘れない>には、「(NICUの看護師が)『怖いという気持ちを忘れずに』とおっしゃっていた。慣れによるミスを防止し、いつまでも緊張感を持って患者と接するためであろう。とても心に響くメッセージだ。看護師として働き始めても、初心を忘れないと自分に言い聞かせよう。」との記述が見られた。

2. 学生が捉える看護師に必要な能力

看護師に必要な能力として学生が捉えたのは【看護の

表2 看護師に必要な態度

カテゴリー (2)	サブカテゴリー (7)	コード (37)
看護の対象を尊重し、 安心感や心地よさをあ たえる態度	看護の対象を主体に考え尊重する態度	患者さんを主体に考える 患者さんをかけがえのない存在として尊重する 個人情報を保護する 患者を特別視しない
	看護の対象に寄り添う態度	相手に寄り添って考える 相手を理解しようとする 細やかな気遣いをする 患者さんとともに病気と向き合う 患者の話を傾聴する
	看護の対象から信頼される、誠実で責任感 のある態度	患者から信頼される態度 謙虚さ 真剣さと真面目さ 誠実に患者と接する 積極的にコミュニケーションをとる 責任感のある態度 緊張感をもった態度 プロ意識を持つ
	看護の対象に安心感や心地よさをあたえる 態度	冷静な態度 親身な態度 患者に安心感を与える態度 明るい態度 愛のある態度 患者を不安にさせない態度 笑顔 おおらかな態度 思いやりのある態度 優しい態度 優しく明るい態度 優しく親切な態度
初心を忘れずに自己を 高めていく態度	向上心をもつ	常日頃から向上心をもつ
	初心を忘れない	初めのころの怖いという気持ちを忘れない 初心を忘れない
	学び続ける	新しい知識を学び続ける 日々成長し続ける 知識・技術を高めていく 視野を広くもつ 経験を積む

対象とかかわる能力】【他職種や地域の人々と連携する能力】【自己を見つめ、コントロールする能力】の3つであった。

1) 【看護の対象とかかわる能力】

【看護の対象とかかわる能力】の内容としては、[観察力] [コミュニケーション能力] [看護の対象を理解する能力] [対象のニーズに即して看護する能力] [知識や技術] [家族への看護の能力] [環境調整の能力] が含まれていた。以下、これらについて説明する。

[観察力] は患者および患者の周囲の人々や、患者に起こった異常を観察する能力である。

[コミュニケーション能力] には、コミュニケーションの対象として、患者、家族、地域の人々、医療チームメンバーなどが想定されており、英会話の能力も含まれていた。

[看護の対象を理解する能力] は＜アセスメント能力＞＜相手の価値観を理解する力＞＜患者の気持ちや立場を理解する能力＞である。

表3 看護師に必要な能力

カテゴリー (3)	サブカテゴリー (10)	コード (49)
看護の対象とかかわる能力	観察力	患者を観察する力／患者の周囲の人々を観察する能力 異常を早期に発見する観察力 必要な看護を見定めるための観察力
	コミュニケーション能力	患者・家族とのコミュニケーション能力 医療者・地域の人々とのコミュニケーション能力 英会話の能力
	看護の対象を理解する能力	アセスメント能力／相手の価値観を理解する力 患者の気持ちや立場を理解する能力
	対象のニーズに即して看護する能力	観察・理解・看護ケアの実施という一連の能力 冷静・適切な判断力／粘り強く考える能力 クリティカルシンキングによる創造力 常に最善を尽くす／迅速に行動する能力 細心の注意を払う能力／状況に応じて臨機応変に対応する能力 「当たり前」のことを「当たり前ができる」ように支援する能力 患者の個性にに合わせて援助する能力 患者のQOLを高める看護の能力 患者の心を癒す能力／患者のそばにいる能力 患者にアクションを起こしてもらうように働きかける能力 患者の人間関係をサポートする能力／疼痛緩和の力 親子関係の形成を支援する力／穏やかな死を支援する力
	知識や技術	豊富な知識／基本的・専門的な知識／知識に裏付けられた技術 看護に関する知識や技術／医療に関する知識や技術 経営に関する知識
	家族への看護の能力	家族をケアする能力／家族を含めて看護する能力
	環境調整の能力	自宅での療養生活の環境作り 快適な療養環境をつくる能力
他職種や地域の人々と連携する能力	他職種や地域の人々と連携する能力	他職種と連携する能力 地域の人々と連携する力
自己を見つめ、コントロールする能力	自己を見つめる能力	自分の気持ちに注意を向ける能力 自分自身を知る能力 自分自身を理解し、気にかける能力 自分に求められていることを客観的に見つめる能力 自分の能力を判断する能力
	自己をコントロールする能力	自分の感情をコントロールする力 自分のストレスを患者に見せない 強い精神力 自分の体調を管理する能力

「対象のニーズに即して看護する能力」は＜観察・理解・看護ケアの実施という一連の能力＞であり、このためには＜冷静・適切な判断力＞＜粘り強く考える能力＞＜クリティカルシンキングによる創造力＞＜常に最善を尽くす＞＜迅速に行動する能力＞＜細心の注意を払う能力＞が求められる。また、対象の状況とともにニーズも変化するため、＜状況に応じて臨機応変に対応する能力＞も必要である。加えて、看護の大きな方向性を見

定め、＜「当たり前」のことを「当たり前ができる」ように支援する能力＞＜患者の個性に合わせて援助する能力＞＜患者のQOLを高める看護の能力＞＜患者の心を癒す能力＞＜患者にアクションを起こしてもらうように働きかける能力＞などと表現された能力も含まれていた。さらに＜患者の人間関係をサポートする能力＞＜疼痛緩和の力＞＜親子関係の形成を支援する力＞＜穏やかな死を支援する力＞といった患者の状況を具体的に想定

して表現された能力も含まれていた。

〔知識や技術〕には、＜豊富な知識＞＜基本的・専門的な知識＞＜知識に裏付けられた技術＞＜看護に関する知識や技術＞＜医療に関する知識や技術＞などに加え、＜経営に関する知識＞という、訪問看護ステーションの経営に関連した知識も含まれていた。

〔家族への看護の能力〕には＜家族をケアする能力＞＜家族も含めて看護する能力＞が含まれていた。

〔環境調整の能力〕は看護の対象の療養環境を整える能力であり、＜自宅での療養生活の環境作り＞＜快適な療養環境をつくる能力＞が含まれていた。＜自宅での療養生活の環境作り＞に関しては「訪問看護のような自宅での療養生活を快適に過ごせるような環境作り」という言葉が得られており、学生は訪問看護にも視野を広げて看護師の能力を捉えていた。

2) 【他職種や地域の人々と連携する能力】

【他職種や地域の人々と連携する能力】は、＜他職種と連携する能力＞＜地域の人々と連携する能力＞であり、訪問看護の場面を想定して捉えられた能力である。前者に関して「訪問看護では病院と違って個人の自宅内で治療するため、医療器具の取扱いや管理に注意をはらい、急変時の対応がスムーズにできるようにかかりつけ医やケアマネージャーと連携をとり、いつでも訪問できるような環境を保たなければならないのだなと思いました。」という記述があった。後者については「訪問看護では、患者さんが安心して暮らすために、緊急時に円滑に連絡がとれるように、地域の人々と連携をとったり」という記述がみられた。

3) 【自己を見つめ、コントロールする能力】

【自己を見つめ、コントロールする能力】は、看護師が対象とかかわるときに対象に向けて直接発揮されるのではなく、看護師が職務を全うしていくために求められる、看護師のあり方に関する能力である。この能力には〔自己を見つめる能力〕と〔自己をコントロールする能力〕の二つが含まれていた。

〔自己を見つめる能力〕は＜自分の気持ちに注意を向ける能力＞＜自分自身を知る能力＞＜自分自身を理解し、気にかける能力＞＜自分の能力を判断する能力＞である。

〔自己をコントロールする能力〕には＜自分の感情をコントロールする力＞＜自分のストレスを患者に見せない＞＜強い精神力＞＜自分の体調を管理する能力＞などが含まれていた。

V. 考 察

1. 看護系大学1年生が捉える看護師に必要な態度や能力の特徴

本結果において、学生は看護師に必要な態度として、【看護の対象を尊重し、安心感や心地よさをあたえる態度】【初心を忘れずに自己を高めていく態度】を、能力として【看護の対象とかかわる能力】【他職種や地域の人々と連携する能力】【自己を見つめ、コントロールする能力】を捉えていた。

【看護の対象を尊重し、安心感や心地よさをあたえる態度】と【看護の対象とかかわる能力】は、看護師の対象とのかかわり方という視点で捉えられたものである。一方、【初心を忘れずに自己を高めていく態度】と【自己を見つめ、コントロールする能力】は、自己のあり方、という観点から捉えたものである。つまり学生は、看護師には看護の対象に向けるまなざしと、自己に向けるまなざしの両者が求められること、すなわち看護の対象のみならず自分自身にも関心を寄せる必要性を捉えているといえる。

2. 学生が捉えた看護師に必要な態度・能力と看護基礎理論の達成目標の関連

〔看護の対象から信頼される、誠実で責任感のある態度〕〔看護の対象に安心感や心地よさを与える態度〕や、〔対象のニーズに即して看護する能力〕の＜患者のQOLを高める看護の能力＞＜患者の心を癒す能力＞＜患者の人間関係をサポートする能力＞などが抽出されたことから、学生は、看護の対象となる人間を身体的・心理的・社会的な側面から捉えていると考えられる。

これを、本データが得られた看護基礎理論の達成目標と合わせて考えてみると、「1) 代表的な看護理論を読み、看護の主要概念である「人間」「健康」「環境」「看護」の各意味とそれぞれの関連性を理解できる。」という達成目標に含まれる、「人間」に関しての理解ができていることがうかがえる。看護基礎理論において、ナイチンゲール、ヘンダーソン、ベナーの看護論にふれたことが、学生のこのような人間観の形成に影響していると考えられる。

達成目標「2) 看護理論の学習を通して、看護が看護学を基盤とする専門職になるまでの歴史的背景が理解できる。」に関しては、本結果とは関連が見られなかった。

達成目標「3) 看護専門職業人として求められる能力を理解し、看護学を学習するという自覚が持てる。」に

ついては、本結果で示されたように、看護専門職業人として求められる能力を理解していたことが明らかになった。

達成目標「4）医療職者・看護職者の倫理的態度について考えることができる。」について考えてみたい。

看護者の倫理綱領（日本看護協会、2006）では、看護者の行動指針として、人間としての尊厳及び権利を尊重すること、守秘義務を遵守して個人情報の保護に努めること、実施した看護について個人としての責任をもつことが謳われている。よって【看護の対象を尊重し、安心感や心地よさをあたえる態度】に含まれていた【看護の対象を主体と考え尊重する態度】[看護の対象から信頼される、誠実で責任感のある態度]は、看護師の倫理的態度として捉えなおすことができる。

また、【初心を忘れずに自己を高めていく態度】に含まれていた【向上心をもつ】[学び続ける]、【自己を見つめ、コントロールする能力】に含まれていた【自己をコントロールする能力】は、倫理綱領にある、継続学習による能力の維持・開発に努めること、看護者自身の心身の健康の保持増進に努めることである。このように学生は、学び始めて3ヶ月にしかない看護の初学者ではあるが、看護において重要な倫理的側面を、看護者に求められる態度や能力として捉えていたと推察できる。

しかし、学生のレポートにおいて、倫理という記述は見られなかった。そのため【看護の対象を主体と考え尊重する態度】[看護の対象から信頼される責任感のある態度]【向上心をもつ態度】[自己を保持・向上させる能力]を倫理という概念と明確に関連させて捉えているとは考え難い。したがって今後、看護者の倫理的態度についての学生の認識を深めるためには、授業の中で、看護師に求められる具体的な上記の態度を提示しながら、それが倫理的な態度であるということを強調して伝えていく必要がある。

また、看護師に求められる態度や能力として捉えた倫理的側面に関する内容を、学生が行動レベルでより具体的に捉え実行するために、つまり倫理的な配慮をもった実践力を高めていくために、今後、技術演習や実習において学びを支援していく必要がある。その中で、看護の対象に向けるまなざしと、自己に向けるまなざしの両者を意識することが、倫理的な実践のために不可欠であることを伝えていくことも重要である。

3. 学生が看護実践家の語りを聞くことの意味

学生が看護師に必要な態度や能力として捉えたものの中には、具体的な看護の場面を想定して記述していると

うかがえるものもあった。例えば＜患者のQOLを高める看護の能力＞＜疼痛緩和の力＞＜親子関係の形成を支援する力＞＜穏やかな死を支援する力＞＜他職種と連携する能力＞＜地域の人々と連携する能力＞などである。これらは、ゲストスピーカーとして招いた3名の看護実践家の語りを受けて書かれたものと推察される。つまり＜患者のQOLを高める看護の能力＞＜疼痛緩和の力＞＜穏やかな死を支援する力＞は、看護師の緩和ケア病棟での体験の語りに、＜親子関係の形成を支援する力＞＜初心を忘れない＞は看護師のNICUでの体験の語りによる影響がうかがえる。学生は、5月に行った身近な看護職へのインタビューの体験と、実践家の語りを踏まえて、本研究で分析対象としたレポートを書いた。よって、実践家の語りの内容がレポートに記述されることは当然の結果である。

しかし、ここで注目したいのは、看護職へのインタビューを体験したり、3名の実践家の語りを聞いたりしたからこそ、学生は看護師に必要な態度・能力について具体的に捉えることができたということである。実習に出る前段階である学生は、臨床のリアルティを実感する機会をまだもつことができていない。よって学生は、臨床での臨場感の伝わる語りを実践家から聞くことによって、看護師の働く場所や役割を具体的にイメージすることができたと考えられる。それゆえ、看護師に必要な態度や能力を、具体的に広い視野をもって捉えることができたと推察できる。今後も、このような機会を授業の中に取り入れていくことの重要性が示唆された。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究では、看護基礎理論の授業を受講し始めて約3カ月経過した学生が書いたレポートを分析し、学生が捉える看護師に必要な態度や能力を明らかにした。今後は、看護基礎理論の学習が進んでいない段階で学生が捉えている、看護師に必要な態度と能力を明らかにし、学習の進行によってそれがどのように変化していくのかを検討する必要がある。

VII. 結 論

1. 看護系大学1年生が、看護師に必要な態度として捉えていたのは【看護の対象を尊重し、安心感や心地よさをあたえる態度】【初心を忘れずに自己を高めていく態度】であった。

2. 看護系大学1年生が、看護師に必要な能力として

捉えていたのは【看護の対象とかかわる能力】【他職種や地域の人々と連携する能力】【自己を見つめ、コントロールする能力】であった。

謝 辞

本研究にご協力くださいました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

文 献

相原ひろみ、酒井淳子、徳永なみじ、岡谷由香里、岡田ルリ子、青木光子、岡部喜代子（2004）：看護系大学生の看護に関する認識の変化－第一報 入学初期における学生の看護に関する考え方－、愛媛県立医療技術大学紀要、1(1)、pp.73-79。
渕野由夏、加藤法子、中野榮子、永嶋由理子、津田智子、

山名栄子（2008）：基礎看護実習Ⅰの実習前後における看護師イメージ変化の比較検討、福岡県立大学看護学研究紀要、5(2)、pp.89-96。

小山真理子、植村由美子、藤原ゆかり、中林雅子、牧野美幸、朝倉美奈、原田竜三（2004）：看護学生の大学入学時の学習への期待および看護・看護職についての認識、神奈川県立保健福祉大学誌、1(1)、pp.85-93。

日本看護協会監修（2006）：新版 看護者の基本的責務－定義・概念／基本法／倫理、日本看護協会出版会、pp.42-43。

関谷由香里、和田由香里、青木光子、岡田ルリ子、徳永なみじ、岡部喜代子（2006）：看護学生の「看護」に対する認識の変化（第2報）、愛媛県立医療技術大学紀要、3(1)、pp.51-58。

清水暁美、荒井葉子（2009）：基礎看護学実習Ⅰで学生が学んだ看護師の役割、看護・保健科学研究誌、9(1)、pp.34-40。